



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

18世紀後半から19世紀のイングランドにおける落穂拾いの慣習

著者	大嶋 渚
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027278

氏 名	大 嶋 渚
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（歴史学）
学 位 記 番 号	甲文第185号（文部科学省への報告番号甲第652号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2018年3月2日
学 位 論 文 題 目	18世紀後半から19世紀のイングランドにおける落穂拾いの慣習
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 田 中 きく代 （副査） 教 授 橋 本 伸 也 金 澤 周 作（京都大学大学院文学研究科准教授）

論 文 内 容 の 要 旨

18世紀末から20世紀初頭にかけて、主として19世紀のことであるが、イングランド農村では、収穫期の最後に落穂拾いの鐘が鳴り響いていた。教会の時間を告げる鐘は、中世の昔から農村の日常を秩序化するものとして作動してきたが、落穂拾いの鐘は近代になって生まれた特別なものである。本論文はこの落穂拾いの鐘に注目し、農業の資本主義化や私的所有権の浸透による農村の慣習社会の変容を説こうとするものである。

落穂拾いの慣習は中世以来の貧者救済のためのものであるが、18世紀末になると、1786年と1788年の裁判が語るように、所有権を侵すものとして否定されるようになった。これによって即座に落穂拾いが消滅したわけではないが、法的には、それは慣習によって承認されたものではなく、ファーマーの許可がない限りは犯罪行為となったのである。

イギリス農村の慣習社会はファーマー側と貧民側の互酬的契約関係によって成り立っていたが、この排他的所有権の主張は、慣習社会を根本から変容させるもので、ファーマー側も貧民側も新たな対応を迫られることになった。貧民の急増とともに無秩序化していた落穂拾いに、貧民たちは自主的な自己規制をすることで、ファーマーたちに慣習の特権の正当性を訴え、長年の落穂拾いの権利を維持しようとした。つまり、落穂拾いの鐘を鳴らして落穂拾いの時間を限定し、また自らの代表である落穂拾いの女王を選出し落穂拾いの規律化をめざした。

本論文は、こうした新たな規制による落穂拾いの出現は、「民のモラル」が、従来の時には対立を伴うモラル・エコノミーから、ファーマーとの妥協をはかる新たなモラル・エコノミーに基づくものへと変化したことを指摘している。

ここで、本論文の内容を具体的に章ごとに紹介することにする。本論文は、序章と終章の他に七章からなる。序章では、落穂拾いの研究動向、落穂拾いの鐘の史料などが説明される。史料について特記すると、19世紀のイングランドではオックスフォード運動の影響で、教区レベルでの全国的な鐘の調査がなされた。その膨大な調査記録は19世紀末から20世紀初頭に出版されたが、近代に鳴り始めた落穂拾いの鐘についても、「調査時に鐘が鳴っていたか」、「鐘が鳴っていた記憶が教区民にあるか」どうか記録されていて、鐘学のみならず、社会史の史料としても有益なものである。

第1章では、落穂拾いの時代背景として、農業の資本主義化に応じて、農村の様相が変化する様が語られる。囲い込み、慣習的共有権の消滅傾向、農業改革などが詳細に述べられるが、落穂拾いが貧民の家計のかなりを占めるようになる実態も検証されている。特に落穂拾いがジェンダー化される農村の経済的・社会的

状況は家族史としても読める。

第2章では、落穂拾いが犯罪とされた1786年裁判と1788年裁判について論述されている。また、裁判への貧民の初期段階での対応として、女性を中心とした落穂拾い人たちが暴力を伴う抵抗運動を起こしたことも語られる。そこにはまだ従来のモラル・エコノミーに基づく貧民たちの慣習的権利の要求が存続していたことが示される。

第3章では、ファーマー側が落穂拾いにどのように対応したかが語られる。18世紀中ごろになると、落穂拾いは悪質なものとなり、貧民が大挙して夜中に落穂拾いをしたり、収穫した麦束から直接に抜き取ったりするようなことが一般化していた。こうした無秩序化した事態に対して、ファーマーたちは規制を望んだが、史料としては、ファーマーを代表して、多くの農事研究家たちが規制の訴えをして、ファーマーと貧民たちの間の相互の愛着を取り戻す必要性を説いている。ファーマーたちは、それ等の提言に基づき、「警官」と呼ばれる「見張りの束」を置き、その麦束が置かれている間は農場に入ってはならないという規制を設けたことが指摘される。

第4章と第5章では、貧民側の自主的な規制についてで、集団化し無秩序化した落穂拾いを、時間を管理することで規制しようとする、貧民側のファーマー側への妥協的な歩み寄りについて述べている。その際、最も重視されたのが時間の管理で、そのために通常の収穫の鐘より一日の作業時間を短くした落穂拾いの鐘が朝の開始と夕方の終了時に鳴らされたことを指摘している。先に述べた教区教会での落穂拾いの鐘の全国的な膨大な史料の分析によるもので、イングランドの諸所の落穂拾いや落穂拾いの鐘の実態についても精緻な実証がなされている。

また、農場への入場や、落穂拾い中の規律化のために、落穂拾い人の女性の中から「落穂拾いの女王」が選ばれたことも述べられている。彼女がリーダーとして落穂拾いの厳しい規制を実行したと同時に、ファーマー側との仲介役をも果たしたであろうことも示唆されている。さらに、鐘を鳴らす寺男たちの賃金として、貧民が皆で少額ずつ出し合ったことも特記されていて、貧民側の自主性も指摘されている。

第6章と第7章は、農業生産の高いノーサンプトンシャーとエセックスの二つの州の代表的な教区に分け入って、その教区の経済的社会的状況とともに、権力関係などを考察して、そのうえで、それらの教区における落穂拾いの鐘や「落穂拾いの女王」を具体化しようとするものである。代表的な教区としては、それぞれモールトンとアシュドンに焦点が絞られている。また、これらの章は、それぞれ19世紀イングランドにおける鐘が持つ社会的意味を問い直すもので、第6章では、鐘といういわば「音の暦」を提示し、落穂拾いの鐘をその中に位置づけようとしている。第7章では、アシュドンでの19世紀末のインタビュー調査をもとに、8月以降の一連の祝祭群の中に落穂拾いを位置付けようとしている。貧民側の代表として選出された「収穫の王」や、収穫の祝祭を通して、貧民の中の意志決定、収穫期における儀礼的習俗などに注目している。一連の祝祭群の中に落穂拾いを位置づけることで、新たな慣習社会の実相を垣間見ようとしているのである。

最後に要点をまとめておくと、農村の近代化は、農村社会を二分化し、下位では貧民を急増させた。こうした経済的・社会的問題は、所有権の概念の浸透とともに、貧民の慣習的権利であった落穂拾いにも変容を迫るものであった。落穂拾いは法的には犯罪とみなされるようになったのである。そこで、貧民側が自主的に規制をし、落穂拾いの鐘を鳴らし、「女王も」選出するようになった。近代になってなり始めた落穂拾いの鐘は、「民のモラル」にまで変容を迫る慣習社会の有り様の変容を告げるものであった。

論文審査結果の要旨

本論文は、主として19世紀のイングランド農村に見られた落穂拾いの慣習の持続という現象を、先行研究の「慣習から犯罪へ」という学説が語る単なる犯罪化された慣習の残滓としてではなく、私的所有権の絶対

化や産業革命と大規模囲い込みの進展という新しい状況に対応して組み換えられた、新しい「民のモラル」の表明として捉えることを提唱する極めて意欲的な研究である。落穂拾いの慣習の変遷を、モラル・エコノミーからポリティカル・エコノミーへの移行という大局的な枠の中に位置づけつつ、この移行を単線的な変化としてではなく、貧民の側の巧みな適応戦略という観点から捉えなおした点に多大な功績が認められる。

特に、18世紀末から鳴らされるようになった落穂拾いの鐘の実態を仔細に明らかにした点に、オリジナルな学術的貢献を認めることができる。落穂拾いの鐘の分布や鳴らされる時間、鳴らし手への代金支払いなどに関する、19世紀末から20世紀初頭にかけて作成された各州の鐘学の書物に基づく丹念な調査から得られた堅実な成果は、高く評価できる。また、落穂拾いの鐘に応じて、落穂拾いを指導した「落穂拾いの女王」の選出といったシンボリックな慣習的行為に着眼し、民衆側の適応戦略を具体的に明示した点は特筆される。

ここで、さらに、いくつか評価すべき点を具体的に付記すると、4点ある。

まず第1に、落穂拾いの鐘の導入とその消滅という時間枠の中で、一方でファーマー側の「見張りの束」や「警官」の慣習、他方で民の側の「女王」の選出慣習を活写し、ファーマー側と落穂拾い人側の二つの文化の共存の状況が次第に破綻していく様相を、史料や研究文献から得られたエピソード群をちりばめて表現している点が評価される。

第2に、おおよそ19世紀初頭から20世紀初頭に、ジェンダー化された大規模な落穂拾いが、かなりの部分、農業技術と、それに関連する世帯の労働・経済の在り様とによって決定されたことを論じている点も説得力がある。

第3に、イングランド全体の包括的な分析のみならず、落穂拾いの鐘が鳴り、「落穂拾いの女王」が出現した教区のうち、代表的なモールトン、アシュドンという教区に視点を移し、末端の教区での、落穂拾い、あるいは落穂拾いの鐘の分析を通して、慣習社会の様相、そこに見られた新たな「民のモラル」を具体的に明示しようとした点は特筆できる。

第4に、年行事や通過儀礼を告げる鐘が奏でる音の暦、そしてそこ見られる農村の習俗の紹介によって、慣習社会における鐘の役割が明示されたことが評価される。また、収穫時の祝祭に見られた儀礼の分析を通して、落穂拾い人という貧しい農業労働者たちの社会が、「収穫の王」などのリーダーをトップに、祝祭儀礼を通して秩序化されていたことも、慣習社会を知るうえで示唆的であった。

以上、本論文の評価すべき点を述べてきたが、批判すべき点もいくつかある。

第1に、本論では、個々のエピソードをデータ化したものから全体の傾向や特色をつかみ出そうとするあまり、細かな史実そのものを、テキストやコンテキストに寄り添ってさらに深く読み込む姿勢にはやや欠ける点がある。例えば、第2章では、1786年と1788年の裁判が扱われているが、裁判史料に見られるそれぞれの判事の所見を分析すれば、慣習か犯罪かという二分化では収まらない見解にも注目できただろう。

第2に、先述のように、本論文の「落穂拾いの鐘」の精緻な調査はオリジナルな学術的貢献であり、新たな社会史の可能性を広げるものであるが、エピソードを多く提示することで全体として浮かび上がるものを描き出そうとする手法は、研究者の優れた点でもあるが欠点ともなっている。論点が読み手に伝わりづらい面があるからであるが、それは先行研究との差異がさほど明示されていないことにもよるだろう。例えば、この論文のアイデア・構成・史料の点において、特に Bushaway (1982) と Hussey (1997) に大幅に依拠している。本来ならば、その学恩をより明確に示し、少しでも違う知見を見せる姿勢が必要ではなかったか。たとえば、これらの研究が参照していない、言語や記憶に着目する「ポスト社会史」的な民衆史の動向や、農村社会を構成する集団内／間の多様性・流動性や統治の問題により敏感になっている農業史や農村史の動向を、押さえた上で振り返っておくことも可能であっただろう。

第3に、農業労働者の一年／一生を通じたメイクシフト・エコノミーの在り様と、それを支えた公式・非公式の回路（労働、兼業、倹約、都会への脱出、互助、チャリティ、公的救済など）の中で落穂拾いを位置づけられれば、さらにこの慣習の個性を際立たせて理解することができたのではないか。そうすれば、本書が提示する「新しいモラル・エコノミー」が落穂拾いにのみ看取できるのかも判明したであろう。

第4に、教区のレベルでの検証についてはその試みを高く評価しているが、扱われた教区の数は一つである。これで十分であるというわけではなく、今後さらなる教区の研究がなされることと考えるが、どのような意味でそれぞれが代表性を持ちうるのかなど、教区を選択について一定の基準をさらに明示しておくべきであろう。教区の研究は、多様で複層的な諸側面に目配りしなければならないが、その権力構造にも迫ることができる可能性を秘めている。それだけに、教区を選択には十分な留意が必要とされよう。

以上、本論文が優れた論稿だけに、今後の課題として厳しい批判を述べてきたが、これらの指摘は本論文の瑕疵ではない。大嶋氏が今後研究者としてさらに発展していくことを願ってのものである。また、2018年2月19日に実施された公開審査会での返答から思うに、大嶋氏自身も強く自覚して、既にこうした課題に応じていく努力を始めたようである。かくして、本論文審査委員3名は、論文の審査ならびに公開審査会での口頭試問の結果により、大嶋渚氏が本論文によって博士（歴史学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。